

心理・適応6尺度と内田クレペリン精神検査による生徒理解 —個別の事例による検討—

Understanding Students Through a Six-Scales Psychological and Adaptive Test and the Uchida Kraepelin Test: Consideration of Individual Cases

(2018年3月31日受理)

西本 素江* 清重 友輝** 福森 護
Motoe Nishimoto Yuki Kiyoshige Mamoru Fukumori

Key words : 教育問題, 教育現場, 生徒理解, 心理特性, 事例研究

抄 録

生徒理解を深めるために、中学3年生216名を対象とし、西本ら(2016)および清重ら(2017)が構成した心理・適応6尺度を実施した。この検査結果と教員による観察結果が合致しないものがあり、精神機能の測定に独自な解釈が可能な(中塚, 1994)内田クレペリン精神検査を実施した。2つの検査の結果を、中塚(1994)の自己他己双対理論及び人間精神の心理学モデルにより解釈することで生徒の心理的特性を明らかにし、さらに教師の観察等の情報を加え生徒個々の事例の検討をすすめた。その結果、生徒理解が深まり、従来とは異なる対応や見落とされてきたであろう生徒への対応が可能になると考えられる。

I. 問題と目的

従来、生徒理解は、教師間の情報交換によってなされてきた。担任、養護教諭、部活動の顧問等、それぞれが得ている情報や観察を持ち寄り、考え合わせて、生徒像を作り上げてきた。

これらの作業はもちろん重要であるが、教育現場は多忙であり、生徒に向き合う時間や教師同士が連携を取り合う時間を十分確保することは困難なことが多い。また、教師の生徒理解は、主に学力や学習態度、生活態度等に限られており、心理特性の把握までには及んでいない傾向が見られる。また、その対象は、問題のある生徒にほぼ限られており、問題の表面化していない生徒が見落とされるおそれが多分にあった。

そこで、教育現場における生徒理解の補助を目的として、西本・清重・中塚(2016)および清重・西本・福森(2017)は、「生徒理解を深める心理・適応6尺度」を構成し、その妥当性の検討を行ってきた。

本研究では、この心理・適応6尺度(以下「6尺度」と略称)を実施したところ、この検査結果と教師による観察結果の間に違和感を覚える生徒が数名見つかった。そこで精神機能の測定に内田クレペリン精神検査(以下「クレペリン」と略称)を併用し、心理特性に関する情報を加え、生徒理解を深めることを目的とする。

1. 「人間精神の心理学モデル」に基づく検査内容の検討

まず、6尺度とクレペリンの検査内容について明確にする。

この点が曖昧なままでは調査結果から得られた情報の意味が判然としないため、その結果を生徒理解に活用することが難しくなる。

教育現場で求められるのは、概念ではなく、実際の生徒指導に役立つ情報である。調査結果を理解し活用するために、まずは、検査内容の明確化を行う必要があると思われる。

この2つの検査は心理特性や精神機能を測ることを目

*徳島市城西中学校

**ひびきのさと人間精神学研究所

的としたものであるため、検査内容を明らかにするには、人間の心理や精神といったものを総合的に理解するための枠組みが必要となる。

ここでは中塚（1994）の「人間精神の心理学モデル」を適用し検査内容の検討を行うこととする。

表1 精神の弁証法的二重性と機能（中塚，1994）
（人間精神の心理学モデル）

自己のモーメント	他己のモーメント	固有な機能
自我	人格	統合性・目的性・一貫性
認知	言語	知能，知識の創造と蓄積
感覚	運動	技能，外界への適応行動
情動	感情	通心，内界の心的な処理
個人的無意識	集合的無意識	遺伝形質と生の衝動 人類が共有する無垢なもの

表1における「自己のモーメント」と「他己のモーメント」は、人間の精神活動が自他の統合という弁証法的過程の中で営まれることの反映として、自他2つのモーメント（契機）を仮定し、この自他2つのモーメントに、5つの精神機能の領域が存在すると仮定している。これらの機能は各水準毎に弁証法的な統合の中にあり、また機能水準間にも統合がある。精神構造を5つの機能水準に区別しているが、それらは相互に密接な関連を保っている。

第1に、一番下の無意識層には、個人的無意識と集合的無意識を仮定している。前者は、個人が生まれながらに祖先から受け継いだ、自分では意識できない遺伝形質（反射や自動的に働く身体組織を含む）や、人間の誰もが生命体の維持という共通にもつ生の衝動などを表している。

後者は、人類が進化の過程で動物を越えて人間らしい特性として得た、「無垢なもの」を表しており、無垢なものとは、純粹で無条件な、他者への指向性のようなものと考えている。

第2に、情動は自己の「こころ」の動きを表している。具体的に従来の心理学の用語で言えば、欲求、要求、動因、動機、衝動、気分、情緒などがここに属している。

次に、感情は、中塚が独自に「人の心を感じるこころ」と定義しているもので、心理学用語で言えば、向社会性がこれに属している。一般的な言葉で言えば、同情心、

共感心、思いやり、やさしさ、愛他心、利他心などと呼べる「こころ」である。

これらの情動と感情は自他2つのモーメントに別れて概念化されているが、2つは別々のものではなく、情動の働きの良くない人が、感情の働きだけが良いということではなく、またその逆も言える。これら2つのものは、1つとして統合的な働きをしており、その働きはお互いの心の通じ合い、コミュニケーションとそれによるそれぞれの人の内界の心的な処理と考えられる。

第3に、「からだ」と呼べる感覚・運動について述べる。感覚はいわゆる五感のことであり、感覚、運動共に心理学でいう通常の用語通りである。

第4に、「あたま」と呼べる、認知・言語領域に属するものは、心理学の用語で言えば、判断・創造・思考・抽象・表象・知能・知識などである。

第5に、最後の「たましい」と呼べる自我・人格領域に移る。まず、自我は、より善い自己を意識する心であり、自己の生き甲斐を追求し、実現していこうとする心であると言える。従来の心理学用語で言えば、自己実現の欲求・意図・意志などがこれに当たる。

次に、人格は、より社会的であろうと意識する心で、社会の要請・期待に従おう、社会に貢献・奉仕しよう、社会を尊重・維持しよう、社会関係を持とう、などといった言葉であらわせるものがこれに属している。

この自我・人格機能領域は、表1にあげたように、統合性、目的性、一貫性の3つの機能を有している。

統合性は、精神機能の各領域がばらばらにならないように、統合、あるいは制御、統制する働きである。例えば、自分が「かくありたい」と思う方向に、全ての他の精神機能を制御する働きであり、目的性は、「かくありたい」と思うその目指すべき目的を設定する働きである。一貫性は、私たち人間の活動に一定の一貫性を持たせる働きと言える。

次に、図1は、表1に示した機能水準間の相互関係を表している。

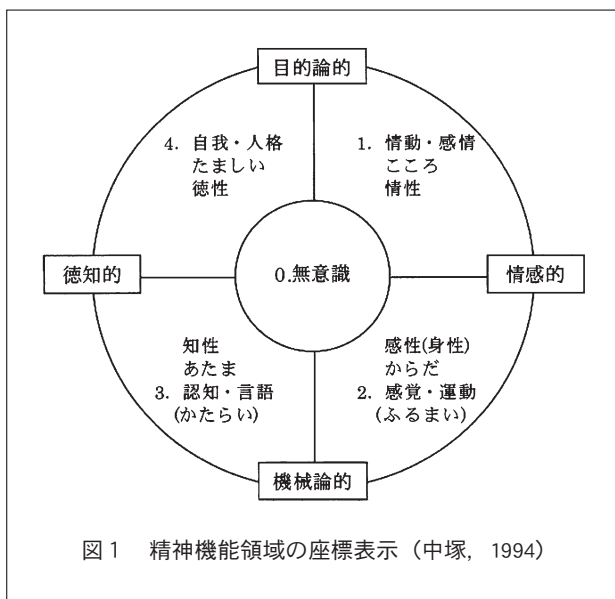
まず、1. 情動・感情と2. 感覚・運動の二つの機能水準は、互いに人間精神の「情動的」な機能を営んでいる。

次に、2. 感覚・運動と3. 認知・言語は、「機械論的」側面を構成している。この言葉は、図1のもう一方の「目的論的」側面と対応している。人間は「機械論的」側面

の感覚・運動や認知・言語だけで生きているのではなく、それに意味を与えるのが、「目的論的」側面の1. 情動・感情と4. 自我・人格であると考ええる。

最後に、3. 認知・言語と4. 自我・人格とでなす「徳知的」側面は、人間だけに固有な側面で、動物には見られない。4. 自我・人格は1. 情動・感情と一緒にあって「目的論的」側面を構成し、またその1. 情動・感情は既に見たように2. 感覚・運動と一緒にあって「情感的」側面を構成している。このことから分かるように、この4つの機能水準はぐるぐると回っていて、相互に関連しあっている。

次いで、6尺度とクレペリンの測定内容について順に述べる。



2. 心理・適応6尺度について

生徒の大まかな心理傾向や適応の状況、ストレスの大きさを測る6尺度(西本ら, 2016)(清重ら, 2017)について概略を述べる。

この検査は、Ⅰ内的自己確立尺度、Ⅱストレス尺度、Ⅲ家庭適応尺度、Ⅳ他者・社会定位尺度、Ⅴクラス・仲間適応尺度、Ⅵ学校・教師適応尺度からなっており、それぞれの尺度は4件法で解答する10の質問項目を有している。そして、結果はパーセンタイル値に変換し、プロフィールに表す。このプロフィールはそれぞれの尺度が

良い状態の場合に、外側に点が取られ、大きく開いた六角形に近くなる。

第Ⅰ尺度の「内的自己確立尺度」と第Ⅳ尺度の「他者・社会定位尺度」は、先に挙げた中塚(1994)のモデルにおける「自己」と「他己」を代表的に表している。「自己」は、自分というものを尊重し、自己主張や自己追求を図ることで、独立した一人の人間としての「自己」を確立していこうとする心の方向性を表し、これに対し、「他己」は、他者との関係性を尊重し、他者を求め、社会的なつながりを欲する心の方向性を表している。

第Ⅱ尺度の「ストレス尺度」において、ストレスが過度に高い場合は、心身の健康を損ねることになりかねない。また、この検査で測るストレスは、家庭適応および学校・教師適応やクラス・仲間適応と深い関係があり、適応が良ければ、ストレスは低くなり、逆にそれが悪ければ、ストレスは高くなると考えられる。

第Ⅲ尺度の「家庭適応尺度」は、生徒が家庭の中でうまく適応できているかどうかを測ろうとするもので、生徒と家族(親)の関係性を把握しようとしている。

第Ⅴ尺度の「クラス・仲間適応尺度」は、クラスの友だちや、仲間と安心してつき合っているかどうかを測ろうとする尺度であり、その年のクラスや仲間の影響を受ける尺度でもある。

第Ⅵ尺度の「学校・教師適応尺度」は、教師を信頼し、学校生活に満足感を得ているかどうか、学校に行くことを肯定的に捉えているかどうかを測ろうとする尺度である。

第Ⅰ尺度から第Ⅵ尺度まで、それぞれの信頼性係数は、次のとおりであった。第Ⅰ「内的自己確立尺度」は、 $\alpha = 0.787$ 、第Ⅱ「ストレス尺度」は、 $\alpha = 0.845$ 、第Ⅲ「家庭適応尺度」は、 $\alpha = 0.937$ 、第Ⅳ「他者・社会定位尺度」は、 $\alpha = 0.825$ 、第Ⅴ「クラス・仲間適応尺度」は、 $\alpha = 0.835$ 、第Ⅵ「学校・教師適応尺度」は、 $\alpha = 0.798$ であった。

その他尺度構成等についての詳細は、清重ら(2017)を参照されたい。

先にも述べた通り、第Ⅰ尺度の「内的自己確立尺度」と第Ⅳ尺度の「他者・社会定位尺度」は、自己を主張する側面である「自己」と他者を尊重する側面である「他己」を表しており、この2つは相反する性質を持つために、「自己」を優先させると「他己」がおろそかになり、

「他己」を優先させると自己がおろそかになるというように、お互いに影響を与え合いながら連動し、作用している。そして、私たちは常にこの2つを弁証法的に統合しながら生活している。

そこで、この「内的自己確立尺度」と「他者・社会定位尺度」がどういった関係にあるか（どちらの傾向が強いのか、あるいは弱いのか。共に値が大きいのか、小さいのか）を見ることで、生徒の心理的傾向を把握することができると考える。

例えば、この2つの尺度で、共に尺度値が高くバランスが良い場合は、「自己」が育ち、また「社会性・他者性」も身につけており、精神的にバランスのとれた良い状態と考えられる。

逆に、両者ともに低い場合は、精神的に未熟で、幼く、物事をあまり深く考えず、その場その場の状況に付和雷同する傾向があると考えられる。

次に、「内的自己確立尺度」の値が高く、「他者・社会定位尺度」の値が低い場合は、自己主張のみが強く、他者の言うことに耳を貸さない傾向があると考えられる。

また、逆の場合には、自分を主張せず（自分の気持ちや意見が言えず）、他者の言う事にそのまま従う傾向があると思われる。

このように、この2つの尺度は、社会の中で「自分」が「他者」とどう関わりながら生きていこうとしているのかという、人としての基本的なあり方を示している。

次に、クレペリンについて検討する。

3. 内田クレペリン精神検査

（1）測定内容

クレペリンは、1分間1桁の加算作業を横につぎつぎとできるだけ速く行う、検査者の時間の合図に従って改行し、連続15分間行う。間に休憩を入れて、また15分間行うという検査である。

この作業により被験者の全体としての作業量（加算が30分間に何個行えたかを1分間あたりの平均で示す）と、1分ごとの作業量のばらつき（30分を1分ずつの小区間に区切ったとき、各1分間ごとの作業量の増減に関する変動のパターン）が情報として得られる。

この各1分間ごとの作業量の増減に関する変動を、検査用紙の1分間で計算された最後の数字を上から順に線

でつないで折れ線グラフ状に表したものが作業曲線である。

創始者内田勇三郎は、1分間の加算でありながら、1分ごとの作業量にばらつきがあり、そのばらつきが表す作業曲線の中にその人独自の「人格特性としての精神機能」の諸特徴を見出そうとしていた（中塚，1991）。

内田（1951）は、次のように述べている。

「作業曲線は、必ず夫々の場合に応じて定まった型をとるものであり、これは作業中の種々の精神機能の働き、換言すれば、それは作業機能の因子の働きによるからである。Kraepelinの提唱した10種に余る作業能力因子の中の最も重要な5つは、「意志緊張」「興奮」「慣熟」「練習効果」「疲労」であり、多くの実験的業績から分析抽出したKraepelinの諸因子の理論は、やがて証明されるものであると信じている」。

この後も因子分析からクレペリンの検査内容に関する研究は多く、中でも、辻岡美延は1974年“内田クレペリン検査50周年記念シンポジウム”において、作業曲線には6個の作業機能の因子が作用していると主張し、その後、第1因子を加算速度因子、第2因子を常態因子（エネルギー水準因子）、第3因子を疲労因子、第4因子を興奮因子、第5因子を周期性リズム因子、第6因子を意志緊張因子と命名している（東村，1976）。

しかし、クレペリンの作業曲線から統計的手法によって分析・抽出されたこれらの因子は、現実の人間の行動を説明できるものではない。換言すれば、人間の行動のどこにその因子が反映しているのかが、2つの因子（疲労因子と学習因子）を除いて明らかになっていない。

このように、従来の研究及び理論ではクレペリンの測定内容を具体的な行動に沿ったものとして十分説明できていなかったと考えられる。

これらに応えるもの、即ちクレペリンの測定内容及び実際の行動とどう関係しているかを明らかにするものが、先に述べた中塚（1994）の構築した自己・他己双対理論と人間精神の心理学モデルなのである。

よってここで、モデル（表1）（中塚，1994）を適用し、クレペリンが測ろうとする「人格特性としての精神機能」

について検討をすすめる。

まず、計算をできるだけ速く行うというのは、認知・言語機能によるものであり、次いで、鉛筆をもち数字間に答えをできるだけ速く書き込むというのは、感覚・運動機能によるものである。そして、情緒や気分を安定させて、単調な作業を「うまずたゆまず」続けるというのは、情動・感情機能によるものと考えられる。

さらに、検査を指示通りに継続して行うという目的を維持し（目的性）、これら3つの機能領域を統合して作業にあたり（統合性）、始めから終わりまで一貫して作業を遂行しようとする（一貫性）必要となる。

これらのことから、クレペリンは、モデル（表1）における無意識以外の4層全ての機能を統合して行う検査であり、自我・人格機能領域における、目的性と統合性、一貫性の高さを測定していると考えられる。

これにより、この検査からは生徒の自我・人格機能の働きの良し悪しと、それによる精神的安定性のレベルを推定できると言えよう。

次いで、クレペリンの判定方法について述べる。

（2）判定方法

先に述べたように、クレペリンの検査内容は明らかになったが、生徒理解を行うためには、自我・人格機能の働きの良し悪しを示す検査結果が必要となる。

検査結果は作業曲線に表れるが、曲線から情報を読み取るためには何らかの判定方法が必要となる。

そのために今回はよく使われている日本・精神技術研究所編「内田クレペリン精神検査・基礎テキスト（外岡，2012）」の10群別を使用する。

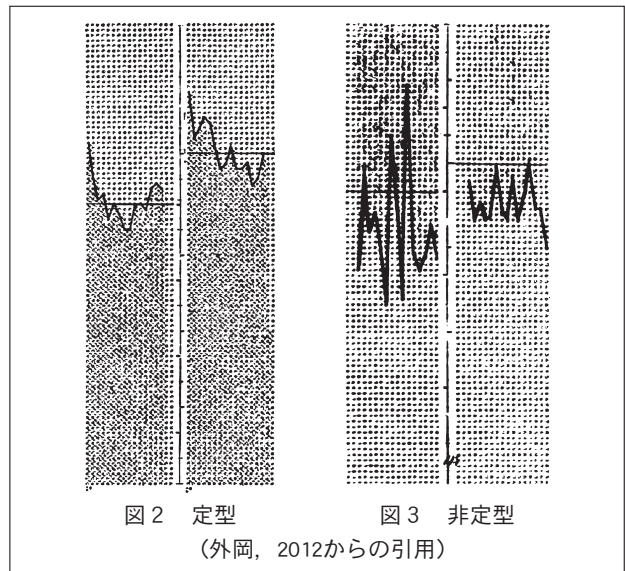
つまり、今回の研究では10群別の第1群に属するものを、上位判定群とし、10群別の第9群及び第10群に属するものを、下位判定群とする。

上位判定群には、作業量が多く、作業曲線は定型（健康者常態の定型曲線）の特徴を完備しているものが含まれている。下位判定群には、作業量が多いものから少ないものまでが含まれ、作業曲線には明らかなくずれがあ

り、非定型特徴が顕著なものが含まれている。

定型曲線（図2）（外岡，2012）と非定型曲線には様々なものがあるが、そのうちの一例を選び図3（外岡，2012）に示す。

以上のことを踏まえた上で、2つの検査を実施する。



Ⅱ. 方 法

2016年度に、公立中学校3年生216名（男子97名，女子119名）を調査対象として6尺度とをクレペリンを実施した。

クレペリン判定結果が10群別第1群に属する上位判定集団と第9，10群に属する下位判定集団について、6尺度のプロフィールを描き、関係をみる。先にも述べたが、6尺度のⅠ「内的自己確立尺度」とⅣ「他者・社会定位尺度」は、人としての基本的なあり方を示している。よってこの2つの尺度を採り上げて実際の分析をすることにする。即ちこの2つの傾向を軸にして、①「内的自己確立」と「他者・社会定位」両方の尺度値が高い生徒、②両方の尺度値が低い生徒、③「内的自己確立尺度」が高く、「他者・社会定位尺度」が低い生徒、④「内的自己確立尺度」は低く、「他者・社会定位尺度」が高い生徒、の以上4つの類型に分けて検討することとした。

クレペリンの結果と、自他のバランスの傾向に適応やストレスの情報を合わせて検討することで生徒理解を深

めることができると考えるのである。

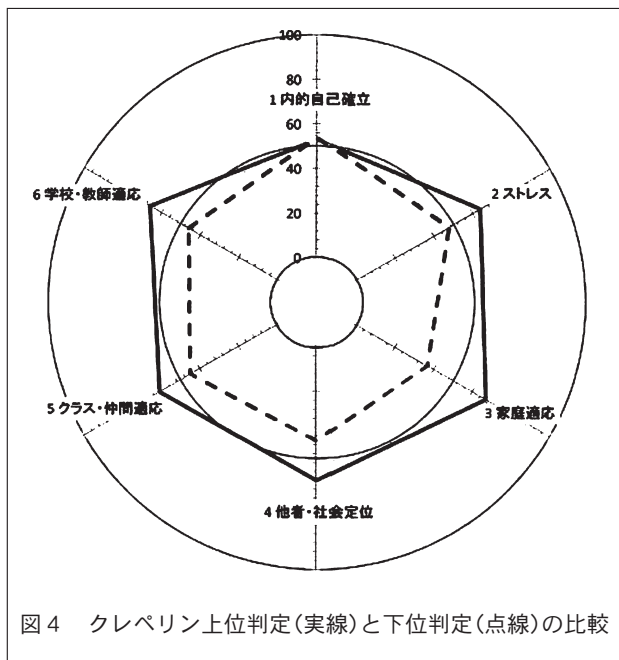
それぞれの生徒について、6尺度の結果をプロフィールに描き、クレペリン検査の判定結果を加える。2つの検査結果をもとに、担任や教科担任および、養護教諭の得ている情報等を合わせ生徒理解をすすめる。

Ⅲ. 結果とその考察

1. 6尺度とクレペリンの関係

2つの検査の関係について検討する。

以前、6尺度とクレペリン検査の比較検討を行ったが(西本ら, 2016), 今回, 新たなデータを得て再分析したところ, 図4に示すように, クレペリン検査の上位判定群19名と下位判定群22名では, 下位判定群は上位判定群に比べ, 5尺度でプロフィールが内側に描かれた。これは上位判定群に比べ, 下位判定群の適応が悪く, ストレスが高い傾向を示しており, 前稿(西本ら, 2016)と一致した結果が得られた。このことから, これら2つの検査結果の関係が同じであるということが再確認され, この2つの検査から生徒理解を行うことは妥当であると考えられる。



2. 全体的な特徴

被験者216名のうちクレペリンの上位判定群19名の6

尺度の傾向は, 第Ⅰ「内的自己確立尺度」と第Ⅳ「他者・社会定位尺度」が共に高く, 精神的にバランスのとれた安定している者が8名, 第Ⅰ「内的自己確立尺度」が低く, 第Ⅳ「他者・社会定位尺度」が高い, 精神的バランスはあまり良くないが, 他者性や社会性に富んでいる者が6名であった。

次いで, クレペリン検査の下位判定群22名の6尺度の傾向は, 第Ⅰ「内的自己確立尺度」と第Ⅳ「他者・社会定位尺度」が共に低く, 精神的に未発達な者が7名, 第Ⅰ「内的自己確立尺度」が高く, 第Ⅳ「他者・社会定位尺度」が低い, 他者性や社会性が低く, 自己中心的な者が7名であった。

3. 内田クレペリン精神検査の上位判定群

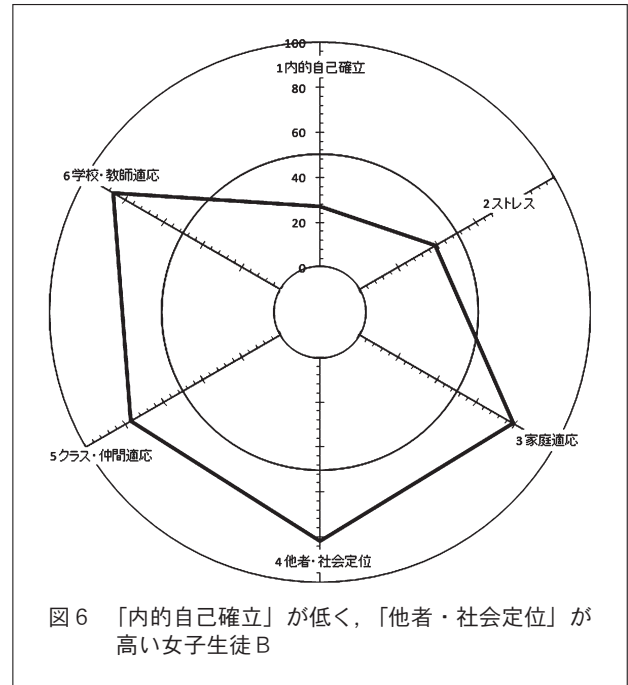
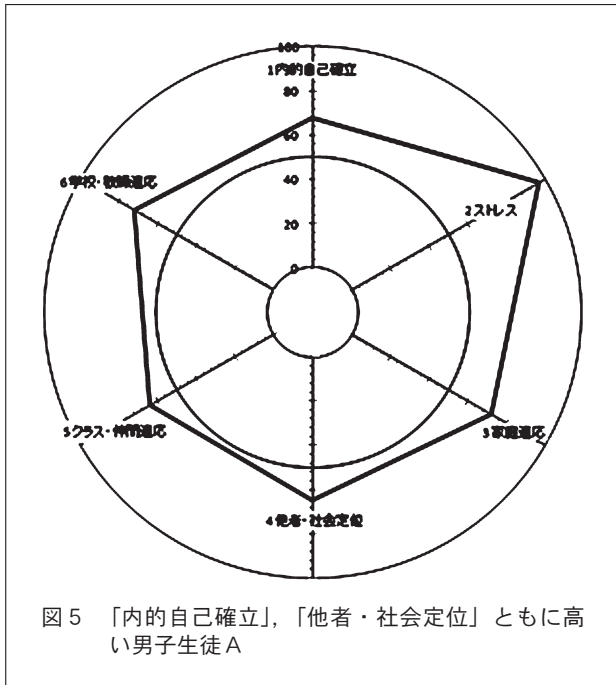
上記の検査の上位判定群のうち, 「内的自己確立尺度」と「他者・社会定位尺度」の結果の組み合わせによる4類型に分けて, 代表的な個人の結果をそれぞれ1名ずつ示す。

クレペリンの上位判定群は, 自我一人格機能の働きは良く, それによる精神的安定性のレベルも高いと考えられる。

1) 「内的自己確立」と「他者・社会定位」両方がともに高い男子生徒A (図5)

Aのプロフィールは, クレペリンの上位判定群に多いプロフィールの1つである。「内的自己確立」「他者・社会定位」とともに高く, 精神的にバランスがとれ, 安定しており, 自分の意見をもって, 他者を尊重できる様子が表れている。また, 「家庭」「学校・教師」「クラス・仲間」全てに適応しており, ストレスも低い。問題のない生徒と思われる。

成績は上位であり, 教師の観察と2つの検査結果の間に違いは感じられなかった。



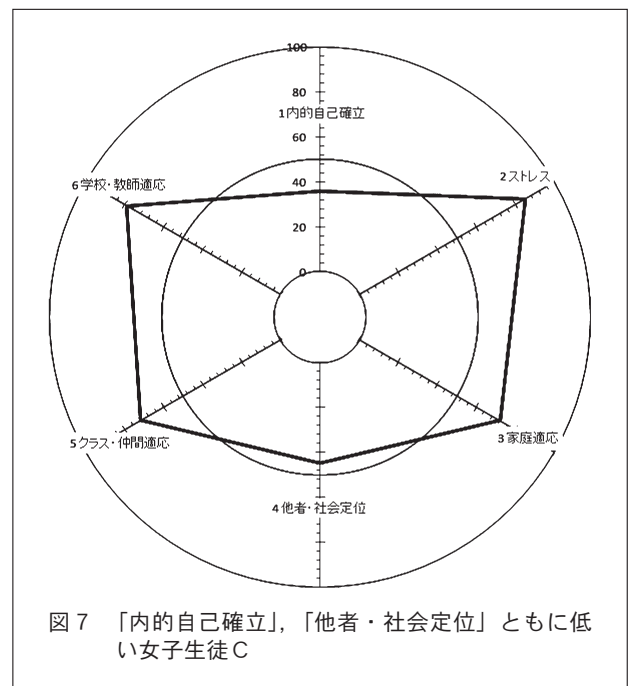
2) 「内的自己確立」は低く「他者・社会定位」が高い女子生徒B (図6)

これもクレペリンの上位判定群に多いプロフィールである。プロフィールは、扇が下に開いたような形で、「内的自己確立」が低いということから、主体性や積極性に欠け、他者の意見に流される傾向が見られる。ストレスは若干高いものの、適応は全てよい。この場合、ストレスの高さは、それぞれの対人関係で相手に合わせるためと考えることができる。

しかし、このプロフィールの結果は教師の観察の結果と異なっていた。この女子生徒は、社会性が高く、友だちを思いやり、人のために働くことを厭わない生徒であり、どの教師も全く問題のないよい子と捉えていたが、プロフィールを見ると、他者の言うことに従おうとするあまり、その言動に振り回され、ストレスが高い傾向が表れていた。

このように、教師が問題なしととらえている生徒に関する「内的自己確立」の低さとストレスの高さには配慮が必要となる。担任または養護教諭等が折に触れて声をかけ、話を聞く必要性が感じられる。

3) 「内的自己確立」と「他者・社会定位」両方がともに低い女子生徒C (図7)



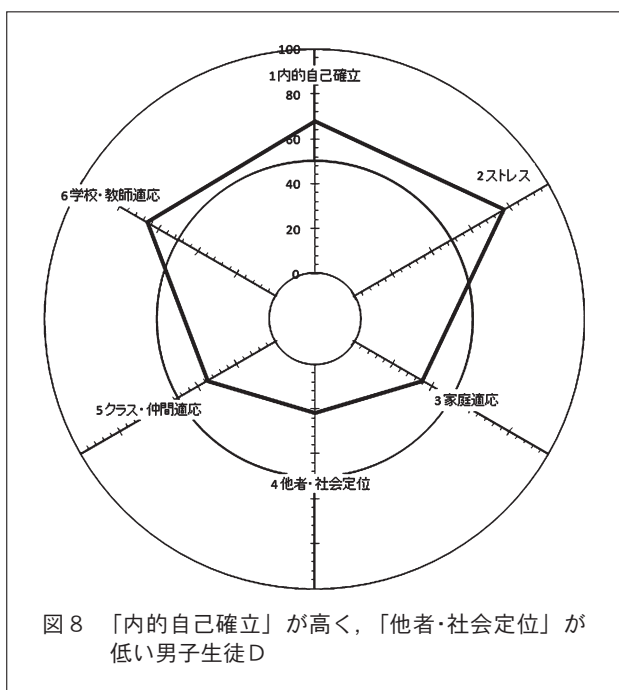
このプロフィールを見ると、教師は大人しく良い生徒と捉えていたが、実際は物事をあまり深く考えず、ただその場その場の他者の意見に従っていた傾向が見られ

る。

授業中や学級会等において自分の意見を言わないことの一因が、精神的に未熟であったことにありと考えられる。

今後、学級の討議や進路選択等において、他者の意見にただ流されるのではなく、状況や他者の意見に加え自分がどう在りたいかをじっくり考えさせ、よりよい自分のあり方を求める方向性を与えるべきであろう。

4) 「内的自己確立」が高く、「他者・社会定位」が低い男子生徒D (図8)



Dは、成績は中位であり、珠算の経験がある。

自己主張や自己追求をしようとすれば、その分だけ他者を尊重しようとする傾向は弱まる。Dは、自己中心的であるとはいえ、学校・教師への定位がかなり高いので、教師の指導に従う生徒と思われる。教師が愛情をもって接し、自己中心的で人の気持ちをあまり考えない言動をひかえ、人を思いやる行動が身につくよう指導する必要性を感じる。

4. 内田クレペリン精神検査の下位判定群

クレペリンの下位判定群は、自我・人格機能の働きは

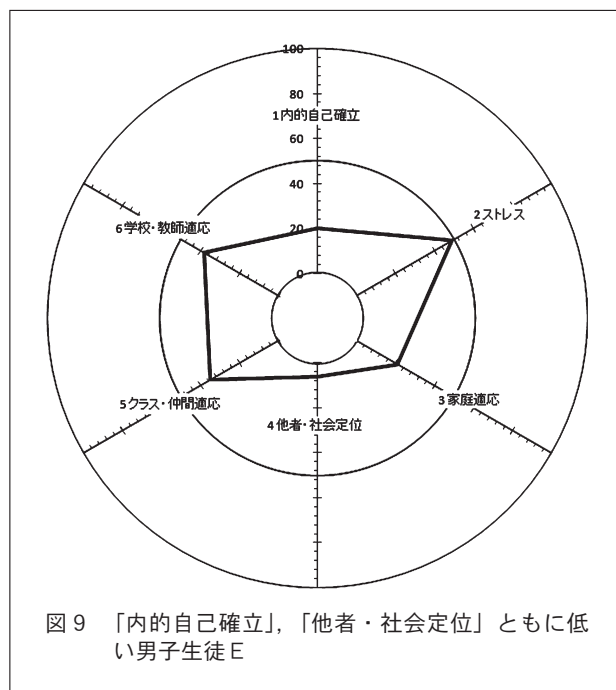
悪く、それによる精神的安定性のレベルが低いと考えられる。

1) 「内的自己確立」と「他者・社会定位」両方がともに低い男子生徒E (図9)

図9のプロフィールは、クレペリンの下位判定群に多いプロフィールの1つである。

プロフィールには、精神的な未熟さや、他者性の弱さが表れており、またクレペリンには、自我・人格機能の弱さが表れている。2つの検査ともに教師の観察を裏付ける結果であるが、「内的自己確立尺度」のパーセンタイル値は20であるのに対し、「他者・社会定位尺度」のそれは6という極端に低い数値であった。

Eについては社会性を身につけることが肝要となる。教師と一緒に楽しい時間を持ったり、誉めたりしてつながりをつくるとともに、トラブルが起こった時には、自分の言動が相手にとってどのような意味を持つかを考えさせる機会とすべきであろう。



2) 「内的自己確立」が高く、「他者・社会定位」が低い男子生徒F (図10)、および女子生徒G (図11)

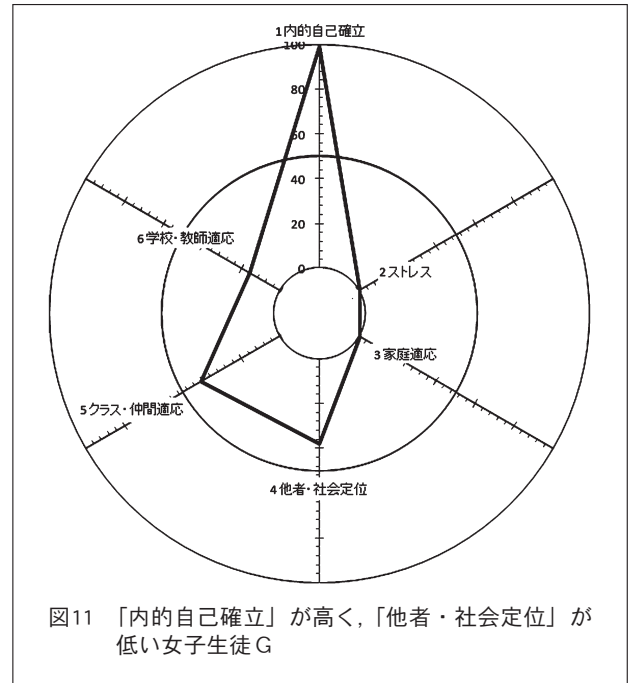
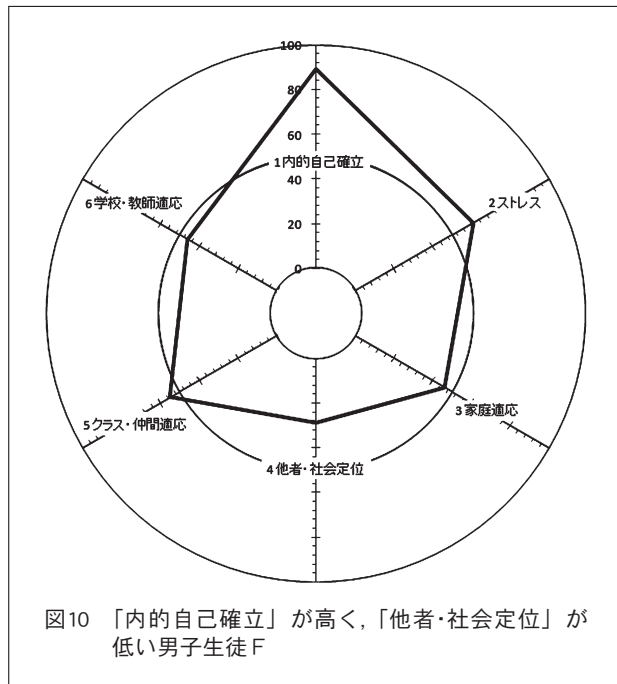
図10 (生徒F, 男), 図11 (生徒G, 女) のプロフィールは、クレペリンの下位判定群の特徴的なプロフィール

である。

Fは、成績は下位であり、自己中心的で好き嫌いははっきりしている。得意な授業内容には積極的に取り組むが、集中が苦手で、不得意な授業では、私語や離席など迷惑な言動が見られる。規範性に欠ける面があり、友人や教師ともに強い相手や気に入っている相手には従順であるが、弱い相手や嫌いな相手には意地悪をしたり、反抗的な態度をとったりする傾向が見られる。

プロフィールには、他者を尊重しようとする傾向は弱体化し、自分を主張しようとするエゴイスティックな部分が前面に現れた様子が表れており、上記の教師の印象を裏付けるプロフィールである。また、自分をコントロールすることが苦手であることが、自我・人格機能の低さに表れている。

Fが信頼している教師が、自己中心的な言動等に対して指導していくとともに、Fと他の教師の橋渡しをし、お互いの理解をはかるようにし向けていかなければならないであろう。



Gは、家庭が家庭としての役割を果たしておらず、愛情を求めているが、口からでるのは配慮のない言葉が多く周りから敬遠されてしまう。また、教師のアドバイスに対しても、自分本位な捉え方をして、耳を貸さないため、トラブルが絶えない。

プロフィールからは、他者への思いやりや配慮に欠け、身勝手な行動が目立ち、攻撃的な言動が常となった様子が見られる。

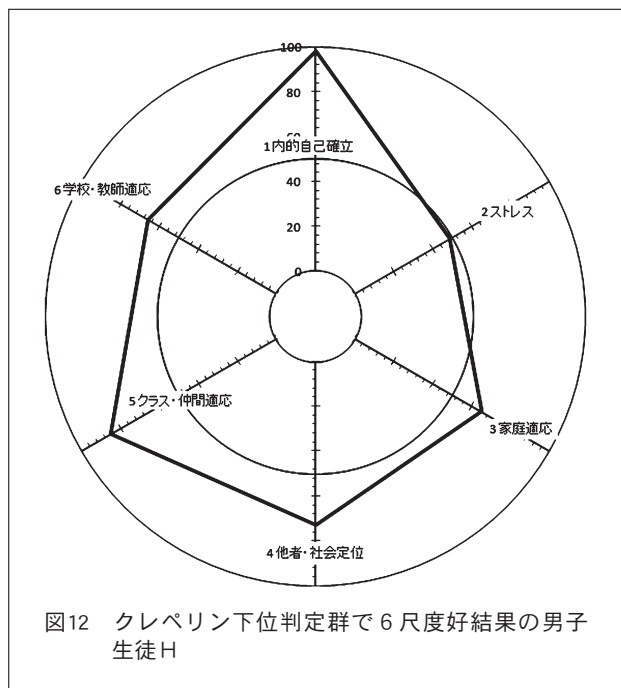
教師の印象を裏付けるプロフィールであるが、家庭適応は0で、ストレスが100である。ここまで顕著な例は稀である。G自身は、生きにくく感じていたであろうと思うと同時に、人間形成における家庭の重要性を目の当たりにする例である。自分も悩むし周りの人も悩ませるタイプであると言えよう。

今後、この生徒と近しい教師が、まず第1に愛情をもって受け止め、誉めたり、共感したりするなかで、仲間の気持ちを少しでも理解するように指導をすすめてはどうかと考える。

3) 「内的自己確立」、「他者・社会定位」とともに高い男子生徒H (図12)

今回、生徒それぞれの6尺度とクレペリンの結果をつき合わせることで、クレペリンの下位判定群の中に、6

尺度のほとんど全ての結果が良い者が2名含まれていることが分かった。その内の一人のプロフィールを図12に示す。



Hは、成績は上位で運動能力も優れているが、自己コントロールが苦手で、少々落ち着きのないところがある。また、要領が良く、強い者には従順な対応をし、弱い者には教師の見えていないところで意地悪をする傾向が見られる。

この6尺度のプロフィールは、自己も他己もバランス良く、人とは仲良くやれているように見てとれるが、上記の教師の印象とは違うものである。

6尺度は、中塚（1994）の言う人間精神機能の認知・言語機能領域で質問に回答する検査であるため、実際とは異なる回答をする可能性もある。しかし、クレペリンは、人間精神機能全般を統合して行う検査なので、隠すことは難しい。Hがクレペリンの下位判定群に入っていたのは、身近にいる教師にとっては納得のいく結果であり、6尺度だけでは測れなかった部分が顕わになった例である。このことから2つの検査を併用して生徒理解をすすめることに意味があると言える。

IV. 総 合 考 察

能力も含めた精神機能全般を統合して行うクレペリンの上位判定群では、6尺度の結果は、精神的に安定しており、社会性が高い傾向が見られる。また、下位判定群は、6尺度の結果から精神的に未発達であったり、自己に偏ったりする傾向が見られた。

クレペリンの上位判定群の中にも、教師は全く問題のないよい生徒と捉えていたが、配慮を要する生徒がいた。

他者の言うことに従おうとするあまり、ストレスが高い生徒B（図6）や、自我が未熟でその場その場の状況にただ従ってしまう傾向の生徒C（図7）である。

Bのような生徒に対しては、優しい声かけや時には一人静かに過ごすことが必要となるであろうし、Cのような自我の未成熟な生徒に対しては、中学時代は自己を充実する時期であり、自己を意識し始め、保護者や教師よりも友人との関係や友人の影響が大きくなる時期であるだけに、友だち関係への注意が必要になると思われる。

下位判定群においては、教師や友人に対して悪態をつき、自分勝手な行動をとりながら、実は家庭適応は0でストレスが100という生徒G（図11）がいた。

Gのような生徒に対しては、クレペリンと6尺度により心理特性や適応状況を知ること、生徒の外面に表れた行動に惑わされずに生徒を理解し、適切な対応をとることにつながると思われる。

また、6尺度は質問紙形式のため、実際とは異なる回答をする可能性もある。

そこで、2つの検査結果から、クレペリンの下位判定群の者や、6尺度で異常が認められる者、教師のとらえている生徒の印象とかけ離れている者等を取り上げ、ケース会議等にかけることにより、内面に問題を抱えた生徒を見落とさない生徒指導につながると思う。

さらに、教師の生徒理解は、それぞれの教師の主観や経験等が加味されており、そこには個人差があった。しかし、これらの検査を併用することで、主観や経験等の影響が軽減され、生徒の心理特性にまで及んだ生徒理解が可能になると思われる。

今後の課題としては、従来、学業成績によるクラス毎の比較はなされてきたが、「内的自己確立尺度」と「他者・社会定位尺度」のクラス毎の尺度値合計や平均を比

較することで、クラスの心理的傾向を知ることができるのではないかと考える。そうすることで教師の印象による「(授業の) やりやすいクラス」「(授業の) やりにくいクラス」等の言葉の根拠が明確になり、クラス編成等の1つの指標となり得るのではないかと考える。

引用文献

- 内田勇三郎:「実用クレペリン内田作業素質検査法手引」,
日本精神技術研究所(1951) pp. 9-10
- 清重友輝, 西本素江, 福森護:「生徒理解を深める心理・
適応6尺度の構成」, 中国学園紀要(2017) 16, 97-
106
- 外岡豊彦:「内田クレペリン精神検査・基礎テキスト」,
日本・精神技術研究所(2012) pp. 64-65, p. 78, p.
63
- 中塚善次郎:「内田クレペリン検査の新評価法」, 風間書
房(1991) p. 2, pp. 71-80
- 中塚善次郎:「人間精神学序説—自他統合の哲学的心理
学の構築とその応用—」, 風間書房(1994) pp. 32-43
- 西本素江・清重友輝・中塚善次郎:「生徒理解を深める
心理・適応6尺度の構成と妥当性の検討」, 中国四
国心理学会論文集(2016) 49, 6
- 東村高良:「内田・クレペリン検査の因子得点判定法の
因子の妥当性」, 心理学研究(1976) 47, 30-39

